



「CHARGE」など、いずれも倒錯した性を描いた漫画で埋めつくしている。また同誌9月号の中島史雄の「制服されたい」などは、性倒錯を突にリアルな絵で描写しており驚かされる。

そのよしあしは別にして、こうした現象は、少年少女たちに倒錯願望がいかにか広がっているかを示し、実に示し

「こので今、思想書として『異例の売れゆきをみせている』『構造と力』(勁草書房)の著者、浅田彰は、ハイブリッド(異種混合的)な性を持つ

中国革命最古参の異端者として



彭述之の死

なかじま みねお
中嶋 嶺雄

五四運動期に北京知識人の一人であった彭述之は、一九二四年に中国共産党の理論誌『新青年』に発表した論文「誰が中国国民革命の指導者か?」で一躍注目を集め、翌二五年から二七年までは、

党中央政治局常務委員、宣伝部長兼機関紙『嚮導』週報編集長として陳独秀、張國燾、瞿秋白、蔡和森とともに

に党中央で革命を指導した。しかし、上海クーデター(一九二七年四月)による革命の敗北は彭述之の立場を大きく左右することとなり、また一九二九年にトロツキの中国

革命論に接したことが、その後の彼の運命を決定した。こうして陳独秀とともに中国トロツキズム運動の危険な道を進むのだが、その陳独秀とも南京の獄中で意見の違いから袂(たもと)を分か

ち、やがて中華人民共和国成立以後は海外亡命と少数派としての苦難の日々をよぎなくされた。

だが、五四運動の女性リーダーの一人で彼のもっともよき理解者であり妻でもある陳碧蘭女史(現在八十一歳)とともに歩んだ彭述之の生涯とその思想は、トロツキズムというよりは初期マルクスのないしは人道主義的であり、最後まで革命中国の民主化、つまり社会主義下の政治革命に大きな期待をかけていた。

その意味でも彭述之は一貫して中国革命の異端者であったが、思えば相次ぐ党内闘争に揺れた中国共産党指導部から早々に離脱せざるを得なかったことが、いかにもインテリ革命家タイプの彭述之の後半生にはかえって幸いしたといえるかもしれない。

私が彭述之に初めて出会ったのは、夫妻がひそかに来日した一九六八年秋であった。以後、パリ郊外の夫妻のアパートで二度お目にかかり、最後は私の翻訳による懸案の著作『失われた中国革命』(新評論)の新刊本をアメリカ南部の保養先に届けた三年前のちょうど今ごろであった。

そのとき病みあがりの彭述之は私を抱きかかえて久々の再会を喜んでくれたが、私は心中これが最後の出会いになるだろうと考えていた。

そのような彭述之にとって最高のプレゼントは、フランスの代表的な現代中国研究者で実娘夫妻でもあるクロード・カタル「程映湘両氏の手になる『彭述之回想録』」中国における共産主義の飛翔』がこの春にガリマール社から刊行されたことであつたにちがいない。

(東京外国語大学教授・現代中国学)

よみうり抄

●フランスを知りフランス文化を考える会講演会 16日午後6時・日仏会館(御茶ノ水駅下車)。「赤いバラは咲いたかー現代フランスの政治と社会」東大助教・外添

要一氏。無料。〇三二一九一―一四一。

●仏教カルチャー・セミナー 17日午後2時・国立教育会館(地下鉄虎ノ門駅下車)。「明星またたく時」南無の会長・松原泰道氏。五百円。問い合わせは日本仏教協会

(〇三二一九三一九五六四)。

●日本アメリカ文学会東京支部例会 17日午後2時・慶応大整監局(国電田町、地下鉄二田駅下車)。シンポジウム「70年代と演劇」石塚浩司氏ほか。〇三二一九一―二七一。

流三ハヤ

83.12.12